

勝林寺

善導独明仏正意

開入本願大智海

令袁定義与逆應

光明名市顯因縁

開入本願大智海

令和1年12月1日

この頃いろいろなニュースが流れてくる中で、国際政治、文化、経済、様々なものが不安定になつてることが感じられます。どの事柄も、何かが転換するところは不安定で、危険な場所となります。例えば宇宙と地球との境のことの大気圏と呼び、宇宙船が地球に帰還するとき、大気圏への再突入が一番難しい作業なのだそうです。また、勝林寺のそばを流れる出石川の水が、豊岡の大橋を通り過ぎるところから、淡水と海水が混在した状態となる、海と川の境のことを「汽水域」と言い、ここでは色々な珍しい生き物が育つと同時に、命にとって、とても危険な場所でもあるそうです。こうした「境界」は他にもいろんなものがあります。それらの境界というところでは、共通して創造性と危険性が混在しているのです。

私たちの社会も、いま何らかの境界に立つているのではないでしょうか。その先を過ぎればそこでは新しい世界が広がり、わくわくするような楽しいことがたくさんあるような気もします。しかし、一歩間違えば世界が破滅してしまう。いそうな、すべての命が無くなってしまうような危険な雰囲気も漂っています。

お正信偈の中で、大きく節が転換する境界が「善導独明」とのことです。親鸞聖人の教えを引き継ぐ後者が、正信偈に節をつけて誦詠するためについた音的な変化なのですが、親鸞聖人にとっても、インドのお釈迦様の教えが七

つたように聞こえます。お正信偈の導師をしている時、「善導独明仏正意」と声高らかに宣言します。親鸞聖人は法然上人が「選択集」の中で「遍依善導」と教えられたことをそのまま受け、そしてより強調して、「善導大師のみが、数ある仏教者の中で、ただ一人だけお釈迦様の本当に伝えたかった教えの意図を私たちに伝えているのです」と、宣言されているのです。

現在の「境界」社会の中では、多民族が入り混じり、情報の氾濫の中で価値観が多様化し、思想が多様化する中で、私たちの考え方は一つの考え方には偏らず、広くいろいろな人の考え方を取り入れ、頑なにならず、柔軟に包括的に考えて行動していくことが大切だとされます。阿弥陀様の願い、親鸞聖人の教えは、限りない対立を乗り越え、曲げることのできない人の計らいを融合させる包摶の力を持つています。しかしそれは、「あれも・これも」という選び取りの思考から出てきたものではなく、「あれか・これが」、という選び棄ての思考の中で、本当に自分の真実をつかみ取った時に生まれる、柔軟な思考なのだと思います。

私たちは今、混沌とした境界時代の中で、毎日「善導独明仏正意」と大きな声で唱えつつ、親鸞聖人の念佛一つの教えに依って、迷うことなく生きていきたいものです。(文責 住職)

お餅つき

十一月二十七日 午後二時より
お供えいただいたモチ米で、お正月の鏡餅を皆でつきます。

ご案内

お餅つき

十一月二十七日 午後二時より
お供えいただいたモチ米で、昔ながらの方法でつきます。合間に、つきたてのお餅をきなこ、砂糖醤油、おろしなどいろいろな味でいただきます。そして、つきたてのお餅のお持ち帰りもありますよ。どなたでも参加できます。ぜひ、どうぞ。

除夜の鐘

十二月三十一日 午後十時半くらい

除夜とは大晦日をさし、一年最後の夜に梵鐘を撞いて、一〇八つの煩惱を滅します。お寺でしかできない経験です。せんざい、雑煮、甘酒、お酒など用意してお待ちしています。

修正会(しゆしょうえ)

一月一日 午前〇時より

二〇二〇年最初のお勤めを皆で致します。ストーブをいっぱい焚いて温かくしてお待ちしています。お正月のお粧巻も一年に一度しか見ることのできない貴重なあります。ぜひ、覗いてみてください。

ご報告

十一月二十一・二十二日、例年に比べると寒さも穏やかな日でした。門徒の皆様のお供えと奉仕とお参りによって報恩講を無事勤めさせていただきました。ありがとうございました。ありがとうございました。ありがとうございます。

参りによつて報恩講を無事勤めさせました。両田とも、本堂に用意した席がきちんと埋まる多くのお参りをいただきました。

ご講師をお勤めいたいた長寿寺の住職のお話

は、とても分かりやすく多くの方がご縁を喜んで下さいました。両田とも、本堂に用意した席がきちんと埋まる多くのお参りをいただきました。

ご講師をお勤めいたいた長寿寺の住職のお話

は、とても分かりやすく多くの方がご縁を喜んで下さいました。

一一月 勝林寺 予定

一日(日) 小田 托鉢 報恩講

二日(月) 小田 報恩講

角折幸江宅 三回忌

三日(火) 小田 報恩講

四日(水) 太田・東里 報恩講

五日(木) 唐川 報恩講

六日(金) 市場 報恩講

野尻・矢根 報恩講

宮嶽義明宅 忍明法要

七日(土) 出合 総仏講

八日(日) 矢根 報恩講

暮坂 報恩講

丸中・片間 報恩講

百合・桐野・寺坂 報恩講

兵庫教区 護持口調整委員会

七日(土) 森友 強宅 一周忌

一四日(日) 東里 総仏講

一五日(日) 森友 強宅 一周忌

一六日(月) 口小谷 報恩講

一七日(火) 鉢山・豊岡 報恩講

一八日(水) 長谷川進宅 一周忌

一九日(木) 口小谷 報恩講

二〇日(金) 口小谷 報恩講

二二日(日) 中山重雄 忍明法要

石田久美子宅 忍明法要

二五日(水) 出石組 忘年会

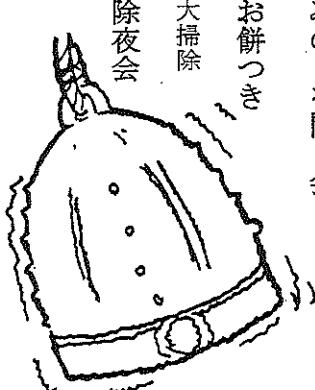
二六日(木) みのりを開く会

二七日(金) お餅つき

二八日(土) 大掃除

三一日(火) 除夜会

(敬称略)



仏の声を聞く道

仏教の經典によりますと、この世を超えたと

ころの仏を、私たちに伝えるためには、それを姿形として、すなわち仏像として象徴表現するが、またはそれを言語として、すなわち名号として象徴表現するのかの、二種の方法をもつて明らかにされております。

そこでその仏を仏像としてあらわした場合には、それに出遇うためには「見る」と、「見仏の道」が語られ、その仏を名号として表した場合には、それを信心体験とするためには「聞く」と、「聞名（もんみよう）の道」が説かれることが、「聞名（もんみよう）の道」が説かれることがあります。

そこで阿弥陀仏とは、もつぱら言語、名号として教説されておりますから、阿弥陀仏に出遇うためには、ひとえに聞くところの道を歩むことが大切です。『無量寿經』によりますと、その四十八願の中の十二種の願文には、「聞名」のことが明かされています。聞名といふことが、いかに重要なことであるかが知れましょう。

そしてまた、その『無量寿經』の第十八願成就文においては、私たちが浄土に生まれて仏に成つていく道について、

「その名号を聞いて信心歡喜せよ。」

と説かれております。私たちは、その阿弥陀

仏の、私に対する告名（なり）、私に向かう招喚（まねき）の声としての、仏の名号を聞けよ、ということであります。

ところが、經典では、その阿弥陀仏の名号、名声を聞くための手段については、詳しく述べられておりません。そこで、インドの龍樹が、新しく凡夫のための成仏道を明かすについて、この阿弥陀仏の聞名の道に注目し、それを採用して、仏の声を聞くためには、その日々において、礼拝（身）と称名（口）と憶念（意）の三業を修めるべきだと主張いたしました。いわゆ

るもつとも易しい仏道としての、易行道（いぎょうどう）の開顕（かいけん）です。これならいかなる人でも安易に歩める仏道です。

親鸞は若いころの比叡山において、出家の仏教として天台宗を学んでおりましたが、当時の多くの民衆が、社会的な不安の中で、きびしい苦悩の日々を過ごしているのを見て、この人々は、それに出遇うためには「見る」と、「見仏の道」が語られ、その仏を名号として表した場合には、それを信心体験とするためには「聞く」と、「聞名（もんみよう）の道」が説かれることがあります。

そこで阿弥陀仏とは、もつぱら言語、名号として教説されておりますから、阿弥陀仏に出遇うためには、ひとえに聞くところの道を歩むことが大切です。『無量寿經』によりますと、その四十八願の中の十二種の願文には、「聞名」のことが明かされています。聞名といふことが、いかに重要なことであるかが知れましょう。

そしてまた、その『無量寿經』の第十八願成

就文においては、私たちが浄土に生まれて仏に成つていく道について、

「その名号を聞いて信心歡喜せよ。」

と説かれております。私たちは、その阿弥陀

仏の、私に対する告名（なり）、私に向かう招

喚（まねき）の声としての、仏の名号を聞けよ、

ということであります。

ところが、經典では、その阿弥陀仏の名号、名声を聞くための手段については、詳しく述べられておりません。そこで、インドの龍樹が、新しく凡夫のための成仏道を明かすについて、この阿弥陀仏の聞名の道に注目し、それを採用して、仏の声を聞くためには、その日々において、礼拝（身）と称名（口）と憶念（意）の三業を修めるべきだと主張いたしました。いわゆ

信心あらん人

法語カレンダー十一月

むなしく生死に

どすん

「あー美味しかった」「ほんない馳走はここでしか食べられない」という

走はここでしか食べられない」という

寿司？すらりと名前の出てこない

し上がったのでしょうか。カニ？お

フランス料理？いえいえ、正解は「白和え」。勝

林寺報恩講のおときの一場面です。この白和え、

こそ、易しい仏法を伝えて、まことの人生の仕合

合わせを与えたいと思いました。そこでいろいろ

と探ねた末に、この『無量寿經』と龍樹の教

えである、聞名の道に出遇い、この道こそが、あらゆる人々が心の安らいをうることのできる、

まことの仏法であると確信し、この新しい易行

なる聞名の道を、語り伝えていく」とと成ります。

した。

いま私たちが学んでいる、浄土真宗の仏道とは、このように親鸞によって発掘され、教示されたところの、阿弥陀仏の名号を聞くところの「聞名の道」であります。かくしてその道とは、私

たちが、その日々において、仏壇を大切にしつつ、それを中心として、礼拝し、称名念佛し、憶念して生きていくなれば、やがてその私から

仏から私の称名が、そのまま逆転して、それは

佛への私の称名であると、深く思い当た

り、そのように味識されるようになります。

その境地を、そのまま信心というわけです。

かくして真宗の仏道とは、称名、聞名、信心の道をいいうるわけです。浅原才市が「才市よ

い。いま念佛したは誰か。へ。才市であります。

そうではあるまい。弥陀の直説」とうたつたとおりです。南無阿弥陀仏。

（信楽嶺廢遺稿法語集より引用）



勝林寺 0796-52-3083 緊急時 090-3708-5424